

実践コミュニティの設計を支援するテンプレートの開発

Development of Template Supporting Design of Communities of Practice

権藤 俊彦^{*1}, 合田 美子^{*2}

Toshihiko GONDO^{*1}, Yoshiko GODA^{*2}

^{*1} 青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター

^{*1} Aoyama Gakuin University Human Innovation Research Center

^{*2} 熊本大学教育機能開発総合研究センター

^{*2} Research Center for Higher Education, Kumamoto University, Japan

Email: gon@a2en.aoyama.ac.jp

あらまし：学習のための実践コミュニティの設計を支援する「実践コミュニティデザインテンプレート」を開発する。このテンプレートでは、実践コミュニティのメンバーを大学生、あるいは若手の社会人とし、正当化された実践コミュニティとして機能させることを目的とする。また、現代的な実践コミュニティにおいて、メンバーを繋ぐツールならびに実践の場としての機能が期待される、ソーシャルメディアを計画的に導入できることを特徴とする。

キーワード：コミュニティ支援, SNS, PBL

1. はじめに

昨今、職場などでは部門の壁を越えた結びつきによる知識創造が、教育現場では学生同士の学び合いが期待され、実践コミュニティの計画的な形成、連携が行われるようになってきている。

荒木は、実践コミュニティへの参加が若手中堅社員のキャリアの確立を促すことや⁽²⁾、その実践共同体のあり方として職場を越える実践共同体と職場との行き来を踏まえたデザイン、メンバーの多様性を活かした活動、コーディネーターの配慮型リーダーシップが重要であることを明らかにした⁽³⁾。

河井は教育現場の中に実践コミュニティを作るばかりではなく、授業外の実践コミュニティへの参加とラーニング・ブリッジングが学生の学習と成長にとって重要であることを指摘している⁽⁴⁾。

教師の実践共同体の取り組みも盛んで、松木らは授業研究の方法論として実践共同体をとらえ⁽⁵⁾、山森は英語教育文化創造という観点から小学校の英語科経営の在り方を追求した⁽⁷⁾。

このように先行研究では、実践コミュニティのデザインに役立つさまざまな事象が明らかにされている。しかしながら、実践コミュニティを企画し、デザインできるようにするためのツールの研究はまだ進んでいない。そこで、本稿では実践コミュニティの企画テンプレートを開発する。

2. 企画テンプレートの範囲

Wengerらは、実践コミュニティの発展過程を第1段階：潜在、第2段階：結託、第3段階：成熟、第4段階：維持・向上、第5段階：変容の5段階に分け、さらに第2段階までを初期段階、第3段階以降を成熟段階と分類している⁽¹⁾。本稿では、まず実践コミュニティを立ち上げることを目的とするため、企画テンプレートの対象範囲は初期段階までとした。

テンプレートでは Wenger らが述べる実践コミュニティ育成の7原則を前提とし、そして第1段階と第2段階の典型的なワークプランを基本として具体的なアクションプランを記述する。

2.1 実践コミュニティ育成の7原則

1. 進化を前提とした設計を行う
2. 内部と外部それぞれの視点を取り入れる
3. さまざまなレベルの参加を奨励する
4. 公と私それぞれのコミュニティ空間を作る
5. 価値に焦点を当てる
6. 親近感と刺激を組み合わせる
7. コミュニティのリズムを生み出す

2.2 第1段階：潜在

主要な課題は、メンバーの心からの関心を引き出し、組織全体にとって重要な問題と整合性が取れるような方法で、領域の範囲を定義すること（領域）、そのテーマを基にすでにネットワークを築いている人たちを見つけ出し、彼らにネットワークを拡張して知識共有を進めることの意義を気づかせること（コミュニティ）、メンバーがどんな知識を必要としているかを割り出すこと（実践）である。そのための典型的なワークプランは、以下のようなものがあげられる。

- ・ コミュニティにとって最も大事な目的を定める
- ・ 領域を明確に定め、魅力的なテーマを特定する
- ・ 行動の根拠を示す
- ・ コーディネーターと思考リーダーの候補者を割り出す
- ・ メンバー候補者をインタビュー（面談）する
- ・ コミュニティ・メンバーを結び付ける
- ・ コミュニティの初期設計を作る

2.3 第2段階：結託

主要な課題は、領域に関する知識の共有が役に立つことを立証すること（領域）、実践にまつわる厄介

な問題について話し合うために必要な、強い結びつきと信頼関係を築くこと（コミュニティ）、そしてどの知識をどのように共有すべきかを、具体的に特定すること（実践）である。そのための典型的なワークプランは、以下のようなものがあげられる。

- ・ 加入すべき根拠を示す
- ・ コミュニティを立ち上げる
- ・ コミュニティのイベントや空間を創始する
- ・ コミュニティ・コーディネーターに正統性を与える
- ・ コア・グループのメンバーの間につながりを築く
- ・ 共有する価値のあるアイデア、洞察、実践を見つける
- ・ 価値を提供できる機会を逃さない
- ・ 上司を巻き込む

2.4 ソーシャルメディアの活用

現代的な実践コミュニティでは、その実践の場としてソーシャルメディアを活用しないことは考えにくい。例えば望月と北澤は、教育実習生を対象にした SNS が、実習生の振り返りを促進することや、情緒的なサポート、実践的知識の相互吟味が行われ肯定的に働くことを述べている⁽⁶⁾。そこで、ソーシャルメディアをどのように組み込み、活用するかは、初期段階から検討しておく必要がある。

3. 企画テンプレートの項目

以上のことがらを踏まえ、実践コミュニティ企画テンプレートでは、「基本情報とコンセプト」、「メンバー」、「組織内コミュニティ設立の場合の提案資料」、「結託段階における基本計画」の大項目を設けた。各大項目では、図 1 に示す小項目について記述する。

4. テンプレートの評価方法

本テンプレートは、まず筆者所属元による実践コ

ミュニティ企画でテストする。実践コミュニティ立ち上げの初期を体験し、計画の立てやすさ、コアメンバーとの共有のしやすさなどとともに、実際にどの程度実践コミュニティを成長させられたかを評価する。

その後テンプレートは評価結果に基づいて改訂し、今度は学生の主体的な活動による実践コミュニティデザイン用ツールとして使用する、複数の実践コミュニティの発展過程を追跡することでより多様な情報を収集し、テンプレートのさらなる精緻化に活かす。

参考文献

- (1) Wenger, Mcdermott and Snyder (著), 野村恭彦(監修): コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践. 翔泳社, 東京 (2002)
- (2) 荒木淳子: “企業で働く個人の「キャリアの確立」を促す学習環境に関する研究: 実践コミュニティへの参加に着目して”, 日本教育工学会論文誌 31(1), 15-27 (2007)
- (3) 荒木淳子: “企業で働く個人のキャリアの確立を促す実践コミュニティのあり方に関する質的研究”, 日本教育工学会論文誌 33(2), 131-142 (2009)
- (4) 河井亨: “学生の学習と成長に対する授業外実践コミュニティへの参加とラーニング・ブリッジングの役割”, 日本教育工学会論文誌 35(4), 297-308 (2012)
- (5) 松木健一, 寺岡英男, 森透, 柳沢昌一: 実践コミュニティを中心とする授業研究の方法論的検討(C 研究プロジェクト報告, I 研究開発部門), ネットワーク: 年報 6, 33-39 (2004)
- (6) 望月俊男, 北澤武: “ソーシャルネットワークサービスを活用した教育実習実践コミュニティのデザイン”, 日本教育工学会論文誌 33(3), 299-308 (2010)
- (7) 山森直人: “小学校における英語科経営に関する研究: 外国語活動のための実践コミュニティのデザイン”, 鳴門教育大学研究紀要 26, 114-127 (2011)

基本情報とコンセプト	メンバー
コミュニティ名 領域 テーマ 分類 助け合い/ベスト・プラクティス 知識の世話人/イノベーション 活動範囲 役割 知識共有プロセス インタビュー計画	コーディネーター 思考リーダー コアメンバー
組織内コミュニティ設立の場合の提案資料 解決すべき組織の問題 コミュニティの意義 このコミュニティが組織にもたらす価値 支援すべき根拠	結託段階における基本計画 知識の共有が役立つことを立証する方策 メンバー間の信頼関係を強固にする方策 知識共有プロセスの具体的な方策 キックオフのアプローチ 定期活動 コミュニティの空間(現実空間とソーシャルメディア)

図 1 テンプレートのイメージ